
続 自然使い ナチュラル・マスター

音無 無音

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続 自然使い ナチュラル・マスター

【NZコード】

N1726S

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

まさかの続編。 自然の全てを操り、戦うもの。 それが、自然使い（ナチュラル・マスター）。 美人元盗賊で刃物使い（カトラリー・マスター）ことマリーと 天才で有名な自然使い（ナチュラル・マスター）のアルエムは、デビットを倒し、日常復帰！・・・と思いまや新たな敵！？ 一人の旅はまだまだ続く！

前作から読んでもらうとさらに理解できると思います。

人物紹介？（前書き）

【諸注意】

ネタバレ有。

本編は三話からです。

人物紹介？

【前作からのキャラ】

アル・ペイズリー（アルエム・D・ペイズリー）

本作の主人公であり、ナチュラル・マスター自然使いという異能力者。

雲のようにふわりとした髪に

雷のように黄色い瞳。

25歳。

使える自然は

- ・火（炎）
 - ・水（氷）
 - ・風（空気）
 - ・植物
 - ・石（岩）
 - ・空（天気）
 - ・土（砂）
- らしいが ?

イル

アルの心の中に潜んだもう一つの人格。

すべての能力を使えるが、マイナス方向の技を好む。

全てがアルの逆で、『真っ黒の髪に、紫の瞳』。

心の中の“黒い箱”に封じられていた。

マリー・ウェーポムンド

変装が得意。

刃物使いガトランリー・マスター

元女盗賊。

ナイスバディ。23歳。（本人的にはふせたいらしい）
結構ケチ。根に持つタイプ。

グレイヴ・レッゴ

世界で一、二を争う程の銃撃手。**銃使い。**
ガン・マスター

31歳。

アルが自ら、“七年前”牢獄送りにした。
が、何故か脱走中の身。

デビット・アリエルド ダーク・マスター 闇使い。

アルエムの身体を奪つた。

ルナエラ・リキュラ【通称・ルナ】

デビットのしもべ的な人。

語尾がウザイ程上がる。

ツインテールの金髪。

特に『*→*使い』ではないが、透視能力と、*読心*能力を持つ。

コリッタ・モウ

ボクつ娘。

“あたし”。*うさぎ&念動力*を使う。
パワーコントロール

ジュレン・アーンフォーム（ウィンド・クリギエル）

ナルシストで女つたらし。
実は、デビット側で、時間使い。
タイムマスター

アニユエル&リリュエル

二人とも異能力者。

双子。

アニユエル：

弟。

精神操作できる。

リリュエル：

姉。

異空間を扱う能力者。
パラレルワールド・マスター
異空間使い。

ゴッド・スパーク

改人カイジンというある特別な人間。

美子と、零にタメ口がきける。

ゴーズ・セルイズ

40歳前後の男。

デステニー・マスター
運命使い。

バルド＝エクス

真っ黒い服や物を好み使う。

デビットと関わりのある人物らしいが・・・
チャラい。

正義と聖者が嫌い。

バッド・シナリオ

嘘の台本

戸梶 美子

黒いものを好む。年齢不詳。

一人称：妾。

口調が曖昧。

最強らしい？

創世者という“～使い”の創世者。

魚谷 あいり

美子に従うメイドさん。

実年齢と外見のギャップが凄い

吉廣 エン

デリーター試験主催者。

歳の割に、見た目は若い。本人曰く、

39歳。

美子と知り合いらしいが・・・？

アラド・シフィノ

一時記憶喪失だった青年。

青い髪と赤い目を持つ。
スピリット・マスター

精霊使い。

青の妖精：ルーブル

零れい

天才依頼請負人。

透き通るような綺麗な黄緑色のロングストレートと
炎と間違えるかのような赤い瞳の持ち主。
一人称は『僕ちゃん』他人のことはどんなに目上でも『～ちゃん』
と呼ぶ。

【続編から新キャラ】

暮鳴 落葉

美子から、秘密情報を教えてもらい(?)
知っていると言われている不思議な少女。

ブランカ・ブリンカ (b r a n c a · b l i n c a)

精神科医。

お得意様や、お金を積んでくれる人しか診察しない。
零のことを「零お嬢様」と呼ぶ。

グレイム・ラルトウリ

最近の若者が着てそうな

赤いパークーに、ダブルブズボンを着用。

フィルン・唯・セロル

巻き毛のツインテールで全身真っ青のブレザー。

一人称は、僕。

カルラ・シャウス

メイド服、黒髪ストレートで、メガネ。

一人称は、わたくしで、誰にでも敬語を使う。

ディシダ・ララロ・アシュ

語尾が珍しく「～エエ」や「～イイイ」など。

人物紹介？（続編からの主要人物）挿絵付（前書き）

ネタバレしますおお

頑張つて16枚も挿絵書きました！

ルナちゃんの髪色ミスりますた^_^

薄いほうが正しいっす

人物紹介？（続編からの主要人物）挿絵付

・・・前編から 　・・・この小説から

アルエム・D・ペイズリー

> i 2 6 0 1 0 — 2 2 0 7 <

本作の主人公であり、ナチュラル・マスター自然使いという異能力者。雲のようにふわりとした髪に雷のように黄色い瞳。

25歳。

使える自然は

- ・ 火（炎）
 - ・ 水（氷）
 - ・ 風（空気）
 - ・ 植物
 - ・ 石（岩）
 - ・ 空（天氣）
 - ・ 土（砂）
- らしいが ?

マリー・ウェーポムンド

> i 2 6 0 1 2 — 2 2 0 7 <

変装が得意。

刃物使い

元女盗賊。

ナイスバディ。23歳。（本人的にはふせたいらしい）
結構ケチ。根に持つタイプ。

戸梶 美子

> i 2 6 0 1 3 — 2 2 0 7 <

黒いものを好む。喪服じゃないよ！年齢不詳。

一人称：妾。

口調が曖昧。マスター最強らしい？

創世者マスターという“～使い”の創世者。

魚谷 あいり

> i 2 6 0 3 6 — 2 2 0 7 <

美子に従うメイドさん。

実年齢と外見のギャップが凄い

零れい

> i 2 6 0 1 4 — 2 2 0 7 <

天才依頼請負人。

透き通るような綺麗な黄緑色のロングストレートと
炎と間違えるかのような赤い瞳の持ち主。

一人称は『僕ちゃん』他人のことなどなん目に上でも『～ちゃん』
と呼ぶ。

暮鳴 落葉【左：制服 右：私服 左下：グレイム側時】

> i 2 6 0 4 1 — 2 2 0 7 < > i 2 6 0 4 2 — 2 2 0 7 <

> i 2 9 6 9 9 — 2 2 0 7 <

美子から、秘密情報を教えてもらい（？）

知つてゐると言われている不思議な少女。

ブランカ・ブリンカ (branca · bлинка)

> i 2 6 0 4 5 — 2 2 0 7 <

精神科医。

お得意様や、お金を積んでくれる人しか診察しない。
零のことを「零お嬢様」と呼ぶ。

デビット・アリエルド

> i 2 6 0 3 9 — 2 2 0 7 <
ダーク・スター

闇使い。

アルエムの身体を奪つた。

ルナを溺愛ちう。

ルナエラ・リキュラ【左：私服 右：戦闘用】

> i 2 6 0 4 3 — 2 2 0 7 < > i 2 6 0 4 4 — 2 2 0 7 <

ちょこつと見えてるのは、白いロングブーツ！

【通称・ルナ】

特に『→使い』ではないが、透視能力と、^{じくしん}読心能力を持つ。
デビットと闇の力を共有ちう。

「リツタ・モウ

> i 2 6 0 3 7 — 2 2 0 7 <

ボクつ娘。

パワー・コントロール

“あたし”。うさぎ＆念動力を使う。
どういうことが、ルナエラと仲良し。

グレイム・ラルトウリ

> i 2 6 0 1 7 — 2 2 0 7 <

最近の若者が着てそうな

赤いパークーに、ダブダブズボンを着用。

フィルン・唯・セロル

> i 2 6 0 1 9 — 2 2 0 7 <

巻き毛のツインテールで全身真っ青のブレザー。
一人称は、僕。

カルラ・シャウス

> i 2 6 0 1 6 — 2 2 0 7 <

メイド服、黒髪ストレートで、メガネ。

一人称は、わたくしで、誰にでも敬語を使う。
本は必須らしい。

ディシダ・ララロ・アシュ

> i 2 6 0 1 8 — 2 2 0 7 <

語尾が珍しく「～エエ～」や「～イイイ～」など。

お調子者。

明 猫鈴
ミシ マオリン

> i 2 6 3 7 9 — 2 2 0 7 <

中国人とかではない。どうやらハンドルネームらしい。

落葉と大親友（？）らしい。

クー & ムー

> i 2 6 6 7 8 - 2 2 0 7 <

不思議な幼い子。

常に裸足。

クー：

いつも本を抱えている。（黒いのが本）

泣き虫。

ムー：

一応しゃべるがほぼ無口。 クーの代弁をすることも？
よく笑い、クーとは対。

人物紹介？（続編からの主要人物）挿絵付（後書き）

ツインテールかぶつてゐううううううううううううう
死にてえ／（^○^）＼

補足：

メイドさんも多いね。

グレイム、ちゃんと眉毛あるから。

フィルンはミクのサイハテ ver. とかじゃないから！――！

技名紹介？（前書き）

名前の省略はご了承ください。
キャラクターについては、「人物紹介」を参照してください。

【諸注意】

ネタバレ有。

（最小限にするため、技の名前だけ明記してあります
本編は三話からです。）

技名紹介？

アル（イル）

ナチュラル・マスター
自然使い

アル
ラーケフェイスト
「岩手」

イル：

ブラック・エンド

「世界の終わり」

「無」

マリー

カトラリー・マスター
刃物使い

グレイグ

ガン・マスター
銃使い

デビット

ルナエラ

パワーコントロール
読心能力、透視能力

コリッタ

ハリネズミラオーム
うさぎに関して：

「針鼠型」
ピッグモード

「おおきくなれ」
リターンリバース
「元に戻れ」

念動力に関する
パワーコントロール

ジュレン（ウインド）

時間使い
タイム・マスター

アニユエル&リリュエル
アニユエル：精神操作

リリュエル：
「異次元の隙間」
パラレルワールド・マスター

ゴッド

ゴーズ
デス・デステニー
「運命崩し」
デスティニー・マスター

バルト
フリー・アクション
嘘の日本
バッド・シナリオ

「お遊びの時間」

美子 創世者
マスター

アラド

「アヴィス・メズル・リードウ」

零

技名紹介？（後書き）

岩手に關してはあれ
ただの偶然です

人探し

数日前。

「人探し、ですか？」

マリー・ウェーポムンドは、いきなり呼ばれたと思いきや戸^{とが}樋^み 美子^こに依頼をされた。

美子は、全身真っ黒な制服に身を包んでいた。
一見普通の高校生だが、創世者^{マスター}という強くて有名な魔法使い一族で
年も200歳を優に超えていた。

「うぬ。日本まで飛んでもらひつけ」

「また、日本ですか？」

「そういうな。ところでアルは？」

「外で遊んでます」

「あいつ25だろ……」

日本

「もう、これで何日探してるのでー。」

「三日ぐらいじゃねー？」

「あんたは気楽でいいわよねー！」

アルエムはのんびりとハンバーガーを食べながら歩いていた。

「というか、あんたの力で探せば簡単じやん」

「真面目にやろーぜ」

「あんたが言うなよー。」

「へーいへーい、ヒヤの氣なさそうにアルエムが言つた。

「わやああああーひつたくじー。」

「…」

「アル！」

「ああ、わかつてゐる」

「ちらへ向かつてくるひつたくり犯に左手を向ける。

「おい、お前止まらねえと」

アルエムが言い終える前に小さなビルからひとりの少女が降つてきた。

「それ、かーえーせー！！」

と言つて、ひつたくり犯にかかと落としを食らわせた。もちろん、そのまま倒れたのだが。

「お姉さん。はこびづわ」

「あ、ありがと」

「なあ、マリー。あのガキなんか、美子さんと言われたガキっぽくないか」

「あー・・・、言われてみればそうね。声かける？」

「頼む」

「ねえ、君」

「はい？あたし？」

「うん。ちょっとといいかな

「ああ、はあ。どうだい」

「暮鳴落葉ですね、はい、ありますよ」

「じゃあ、落葉ちゃん」

「暮鳴です」

「ああ、はい・・・・・」

第一回 あさひのマリー。

もちろん、アルエムは横で食べ物に夢中だった。

「えー、もう、一耗はーーです。

えつと、一いつかの覺悟いため「アリサナジ」

構いませんよね。構ってる暇あれば今すぐ死ね」

後半怖かつたがマリーは耳に入れな

「それじゃ、あたしの家に来てよ」

「今？」

「そ、今。あんたらに美子さんが言いたかつた事を教えちゃーう」

「お前、美子さんのこと知ってるのか？」

そんなところでアルエムが反応する。

「なあに、おやじのやうなのがへ」

シーカルに笑い、質問をスルー。

無駄話は省きたいらしい

「そつちで、準備必要だつたらまつてあげるよ、何年でもね」

「いや、そんな、話だけでしちゃう？」

「ふうん? じゃあ、もう一度と言わなきゃ、

“戦えるのか？それで”って言つたんだよ

いちいち偏見かけてんじゃねえよ

「……………。」いや、いやあ、まあ、こ

れでも戦える、し・・・」

「ふうん・・・」

落葉は嘆息混じりにやがて言った。

十数分して、ついた家はただの一軒家。

「何突つ立つてるの？さつさと入つてよ」

玄関を開けて待つている落葉。

苛立ちを隠せず、足が微かに揺れていた。

入ったところで、外觀とれほど変わらず普通の一軒家。

落葉は階段を登っていた。

「早くしてよ」

と焦らす。

「あれ？最後まで登らないの？」

階段の中腹まで来たところで落葉は止まつた。

「いいの、ここで」

階段に向じている壁に手を当てる。すると。

ガコーン、と音を立て、まるで未来の部屋かのような部屋が現れた。

「入つてよ」

学校

鳴り響くチャイム。

当の落葉は、校庭にいた。
通学しているらしい。

後ろから、誰かが押した。

「……………ツ！」

それに過剰に反応した落葉は、持っていた傘を後ろの人ぶつけ、
その人から離れるように数メートル跳躍し、離れる。

「つたああ・・・・・」

「あ、え、つと、同じクラスの・・・・・・・

やつてしまつたという顔をし、一步後退する。

「『』、ごめんなさい！つい癖で

「ど、どんな癖よ・・・・・・」

やつちやつたあ・・・・・・・学校側にはまざりすなつて言われてた
し・・・・・

心中でちょっと反省会を開く落葉。

そして、玄関から逆方向をむき走り出す。

「ちよ、学校は！？」

「・・・・・・」

サボつてしまつた。

「・・・・・・・・・・・・ただいま

「あら？ 早いじゃない。」

「もう、学校いかない」

「またあ？ 今度こそ本当よね？ 電話するわよ」
母親がこんなにすんなり許可したのは当たり前。
落葉は、小学六年生の過程で既に成人並み。
否、それ以上の知能を持っている。

更には去年。

ハーバード大学を一発卒業。

いわば天才である。

「うん。だから」

「アルエムさんたちの修行手伝うのよね
「外国いくよ」

「行つてらつしゃい。お土産は？」

「期待しないで」

サクサクと話を進める一人。

階段を上がっていく落葉に対し母が言った。

「あの二人夜遅くまで練習してたわ。起こすの？」

「・・・出発は一週間後」

「了解です」

「起きて、起きて」
ゆさゆさと身体を揺さぶる。

本当に遅くまで練習してたようになかなか起きない。

アルエムが、だが。

マリーはとつぐのとうに起きていた。

「ほんとに手伝ってくれるの？」

「しつこいな」

「あ、はい」

「えっと、学校は？」

「学校？ああ、そんなのもあつたかな」

「そんなもの？」

「学校なんて小六の過程でいかなくていいはずなんだ」

「どういう、意味？」

そのままですよ、と嘆息する。

『なんだこの子、気持ち悪い！』『こんな子と一緒に授業進めてたら大変だわ』

言われ続けてきた。

天才だから、羨まれる。

そんなの嘘だ。戯言だ。偽物だ。

それは、天才の序章だから。本当に、本当の、本当な天才じゃないかったから。

だから。

『頭いいね』『運動できるね』で終わる。
偽物だから。戯言だから。嘘だから。
そんな天才なんて。

本当の天才は何か?
実際の天才は何か?
現実の天才は何か?
お前の天才は何か?
貴様の天才は何か?

そんな知つてる天才じゃない。
簡単じゃない。

嫌われ続けてきた“本当の天才”は。
天才であることを武器にして、戦つた。
それがまた、まずかった。

『あんな能力ありかよ!』『なんだあの技、気持ち悪い』
必ず不評。

嫌われ者の“本当の天才”は誰を信じればいいの?

「落葉?」

「!」

咄嗟に我に帰る。

「・・・・・・・・・・私はあんたらを信じていいいんだよね
「もちろん」

逃走と捜査

朝起きると、落葉とマリーとアルエムがいたホテルから、は、アルエムが姿を消していた。

「ど、どうしたこと！？携帯にもつながらないわ・・・」

「携帯なんて、電源切ればいい話。チェックアウトするから準備して」

てきぱきと自分の荷物をまとめつつ、マリーに叫びつ。マリーもそれに従い、自分の荷物をまとめはじめた。

無事にチェックアウトを終え、ホテルから出る。

「あたしの、携帯番号は教えたよね？」

「うん、昨日もらった」

「見つけたら電話して。あたしも電話するから」

こうして、ふと消えてしまったアルエム捜索活動が始まった。

「なによ、教わってる立場でふと消えちゃうなんて」と言つて、“空から”捜索を行なつていた。

飛んでいるわけではなく、

“何かプロック状の結界の様なモノ”に乗り、空中にじどまつているのだ。

「ここ一体にはいないな・・・！ まさか、美子さんのところへいる、とか？」

それに気づいた落葉は、結界を解き、近場のビルの屋上へ降り立つ。カバンから携帯を取り出し、アドレス帳を開く。

かけた先の電話は

『もしもし？』

マリーだ。

「マリー、あいつは、美子さんの家にいる！」

『なんで？』

「…………さつと、

あたしが、美子さんからの伝言を焦らして伸ばしたからだー。』めん！』

『別にいいわ。今どこのなの？』

『ええっと、東京タワーに近い場所…………。言つてもわかんな

いな。』

『じゃあ、タワー集合で構わない？私も近いの』

「了解」

集合場所は、東京タワーになった。

落葉はいくつか結界を作り、それに飛び移り移動を開始した。

逃走と捜査の完結

「教えてもらつてないい？」

「はい」

少し驚きつつも平常心を保ち美子に応える。

美子は相変わらず漆黒のセーラー服に身を包みそれに合わせない口系列の部屋にいる。

(落葉はこじつらの忍耐力を問つたのか?)

ニヤリと微笑む。

「落葉も面白くなつたな。」

「?」

美子はそばにあつた真っ黒の傘を手にする。

それを思いつきり振つた。

その“重い重い一撃”はアルエムに直撃する。

「ぐあ！？」

壁をぶち破り、隣の部屋にまで飛んだ。

「美子様！？」

即座にメイドのあいりさんが駆けつけてきた。

「おひ、あいり。言つ事きかん馬鹿弟子を調教してやつとるだけだ。」

「心配には及ばんよ、とはにかむ。」

「立て、アル。お前みてえな頭のかつたああい奴にやあ、じつまつ

手段しかねえ」

「師弟・・・・・勝負ですか」

「べつ、ヒロ内の大血を吐く。」

同時刻

いい勢いで豪華な扉が開く。

「おひへ・マニーわざい、落葉わん

「！　あいりさんーあの、アルきてますか？」

「ああ、こいつしゃつてますよ。でも今はお念いにならない方がよ

「あー、おまえの口が切れる。」

否、強制的に切れさせられたのだ。

がらがらとガレキから現れたのは美子。ガレキ付近には、アルエムの姿。

「げつほ、げほ・・・・・」

「立たなああ！」

ガレキから降り、アル

「ちょ、美子さん何してるんですか！」

マリーナが止めに入る

それに対し
顔をしかめ睨みつける
「教え子を正すのは、師匠の仕事でね」

「アルが何したんですか？」

美子は深く嘆息し、頭を搔いた。

४८

そういうのとあいりが反応した。

「応接室ですね」

「客間で構わん。茶でも出しておけ。
妾はこれを直してから向かう あたし

「了解です」

「お怪我大丈夫ですか？」

茶菓子と紅茶を出し終えたあいりが問う。

「つてて・・・・、あ、大丈夫っす」

「みして」

落葉が詰つ。

「あ？」

「見せる」

「ああ・・・・」

傷口を見せるとみるみる治つていぐ。

「焦らしたあたしが悪い。『めんなさい』
完治したところで、そう切り出した。

「？ 別に怒つてねえよ？」

（あ、でも、ホテルを抜けたのは焦らされたせいか・・・・）

「お待たせ。」

美子がきた。

家を直してきたのだるい。

「さ、話そつか」

逃走と捜査の完結（後書き）

長くなりすぎた。

新たな

「簡潔に言おう、新たな敵だ」

簡潔すぎる。

「も、もう少し詳しく」

「ん、そだな」

寄、もと基、

アルエム達に出されたはずの茶菓子は
美子によつてきれいさっぱり食されてしまつた。
それを名残惜しそうにアルエムがからの皿を眺める。
「これ、余所見するでない」
と傘で叩かれた。

「デビットから報告があつたのだ。

最近の、“下克上”事件というものを知つとるか？」
「ああ、小耳に挟んではいますよ。確か、元殺人鬼、でしたつけ」
「そうだ。元殺人鬼がそれを仕事とし、仕事を終えさらには依頼人
を殺す。」

「下克上もくそもねえな」

アルエムが愚痴をこぼす。

「うるさい。アルは黙つておけばいいのじゃ」

「なんで俺だけ？」

「さて、それまではただの序章だ」

無視である。

「それだけでは、警察ざたでお仕舞いちゃんちゃん、なのだが」

“死んだ依頼人の傷を見たところ、あれはただの殺人鬼ができる
よつな、

否、人間わざじやない”

美子の言葉に付け足すように落葉が続けた。

「どういつ、意味だよ？」

「・・・・・あんたら、『使い^{マスター}』が能力を使用するとき、自分ではわからない特殊な電磁波が出るのは知ってるよね両手の人差し指で軽い静電気をつくり、みんなに見せた。“ぱりぱり”となりながら電気が発せられているのが伺える。

「それが死体から検出されたんさ」

「な！」

静電気を解く。

「これじゃ、警察も妾^{あたし}に頼まざるを得ない。」

「納得いきました・・・・・」

「まあ、安心しな。弟子たちには極力協力を頼んである

当たり前だ。

アルエム達だけで何人いるかわからない敵に突っ走る事は無謀だ。

「その中の一人に、デビットが？」

「うむ。何かあるかの？」

あるに決まっている。

昔、自分の身体を奪われ、一戦を交えた相手だ。

そう簡単に相容れる訳が無い。

「身体

そうアルエムが言う。

「デビットの身体は？」

「元通りだ。まあ、戻したのは妾^{あたし}じゃあないがな」

チラリ、と目線を落葉へ移す。

「？ ん、ああ、デビットさんって人を戻したのはあたしです

「！？」

「何か？」

不適に笑む。

彼女は謎が多過ぎるとマリー^らは確信した。

新たな（後書き）

マニーと美奈を、よく、間違えます

仲間集め

「グレイムー」
少女がつぶやく。

「あ？」

「こわつー」

少女は巻き毛の水色ツインテールでブレザー。
ブレザー色も青で、全身真っ青だ。
グレイムと呼ばれた男は赤いパークーに、
黒いワンサイズ上のだぶだぶズボン。
そしてもう一人。

「カルラ」と呼ばれる女性だった。

「はい？」

彼女はメガネ、メイド服、黒髪ストレート。
説明のしやすい容姿だった。

「なんでしょう、グレイムさん」

「準備はいいか」

「わたくしは何時でも構いませんよ」

「そうか」

じゃあ、と切り出す。

「はじめようか」

「今なんか言った？」

「どしたのよ、アル？」

「…………いや、なんでもない」

『零のト「いっといで』

美子さんの計らいで、零に会い、敵の居場所を明らかにする協力を頼め、というわけだ。

場所は居酒屋。

地図まで持たされた。

「ええっと、この角を曲がって……」

目の前に見えた料亭が居酒屋です。

「料亭じゃねえか！？」

まったくもつて違つものである。

その料亭には“貸切”的一文字。

この料亭、結構有名店なんだけれどね。

「やあやあ、おふた方！アルエムちやんおつきくなつたねえ！」

小さかつた頃から会うのは初めてなきがしちゃうね！」

「初めてですよ、実質。何度か電話とかではお話しましたが「かしこまるなつてー！どうかな？一杯」

「あ、いえ、それよりもですね」

大好きなお酒を否認され、顔をしかめる零。

まあ、仕事の話だから、仕方ないと諦めたらしく酒を置く。

「デビットちやんから聞いちゃつたんだよ」

口に酒のつまみを運びつつ言つ。

喋るか食べるかはつきりしない。

「新たに、敵、ね」

「聞く限りそーと一厄介なもんだね！」

「そうですよね、俺もそう思います」

「ん、わかつとるよ。僕ちゃん、出来る限り協力しちゃうね

仲間集め（後書き）

振り返りついでに前のナチュマス読んでたら
前の方が面白いとか・・・・・
日々劣化してますね。
これからも読んでもらえると嬉しいです（ry

肉弾戦修行

昨日、零の自宅（？）へ向かった。
協力してくれる、力強かつた。

「だけど」

アルエムが言つ。

「相手の力とか、なーんも俺ら知らねえんだよな
ここは美子の自宅（？）。」

零といい、美子といい、神出鬼没で別荘を嫌とつまび持つて
いる金持ちだ。

この一軒は美子から借りたのだ。

一人一部屋。

なんとも豪勢だ。

もちろん、修行も含むため、美子もここで寝泊まりする。
明日は早い。

（寝るか）

明日のため、アルエムは目を閉じた。

「おつはよーひーしょくーん！」

零である。

「え？」

「やあやあ、美子ちゃんに朝早くから呼ばれちゃつてえ。

一日酔いなのにひどいよねー。」

昨日協力すると言つたのに飲む方が悪いんです。

「今日の修行は僕ちゃんたんとーう！」

美子ちゃんスケジュールちゃんと組んじゃつてるねー！

僕ちゃん感心、感心

腕を組みうんうん、と頷く。

「えっと、それよりも、なぜ、あなたが？」

「んえんえ？ 僕ちゃんもちやーんと戦えるつてことだよーつ」と言つて取り出したのはナイフ。

“ひゅひゅん”と風を切りつつ回りついている。

「つて言つてもアルエムちゃんみたいに

僕ちゃんは遠距離戦得意じやないからねー

それはもちろんだ。

マスターを所有しているわけではない。

「だから、僕ちゃんは肉弾戦を鍛えちゃつ

よろしくね、と微笑んだ。

「じゃあ、俺が行く

アルエムが一步前に出る。

「俺はほぼ、ナチュラルちからに頼つてきたからな

腕まくりをして、本当にやる気らしい。

「んふふ。安心しちゃつてよ。

僕ちゃんは君たちが思つてゐるほど強くもないから

「な

アルエムはこの大きな庭に仰向けになつて倒れていた。
惨敗、である。

「強くないつていつたんじゃ！？」

「あれは、言葉の綾つてもんだよ。ん？なんか違うな。
まあ、口は災いのもとつていつちやうからね

嘘で、災いを起こした。

「言葉で騙されちゃうアルエムちゃんもアルエムちゃんなんだよ？」

「単純バカ・・・・」

「マリーがボソリといつた。

「それに一言言うね」

回していたナイフを止めていう。

「アルエムちゃんはナイフを意識しすぎかな。
かと言つて意識しないのもあれだけど」

「・・・・・・・・・・・・」

「こひじりことなら、刃物使いこと、マリーちゃんと戦つちゃえれば
よかつちゃつたね」

「私、ですか」

「でも君は肉弾戦はだいじょうぶみたいだね」

「！」

「精神面があれかなー。アーユエル、リリュエルに鍛えてもうっち
やつて」

あの二人か、とマリーは思い出す。

あの一人には前、世話になつた。

また、世話になるのか。

「それがやーなら、そだな、いい、精神科医を紹介しちゃうね」

「？」

肉弾戦修行？

「イニカ」

零に持たされた地図の通りに歩くと、一軒の古い家についた。
ここが彼女曰く。

いい精神科医の家らしい。

「名前はなんて読むんだろう？」

「b r l a n c c a • b l l i n c a ブ、バ？ブーランカ？」

「ブランカ・ブリンカ、だ氣をつける、女」

「！」

彼は、悠々と庭の手入れをしていた。

「ブランカさん」

（女みたいね）

「ああ、女みてえな名前で悪かつたな」

「！？」

（私口に出していった？）

「いつてねえ」

「盗聴やめてください。もう驚くのも飽き飽きです」

「そーか、お前アーユ、リリュにあつてたつけな？」

それでも驚かねえのはすげえな

「アルと一緒に旅してるので」

ブランカは「アル、アル？」と呪文の様に言い始めた。

「誰だつたかな、アル、アル、アル、アル」

“ばつん”と植物の切れるいい音がした。

不格好になつた。

「うおおお、間違えた！ ア、アル！ ああ、

“アルエム・D・ペイズリー”か

「ご存知で？」

「ナチュラル・マスター

「自然使いなんて、名がしれてるわ

カト・ラリー・マスター
なあ、刃物使いちやんよ

「！」

「零さん

「ん？」

心配そうにアルエムが話しかける。
きっとマリーについてだ。

「マリー、大丈夫でしょうか」

やつぱりマリーについてだつた。

「大丈夫だつて！ ブランカは変な奴だけど、しつかりしてるから

「ブランカ？ 女性ですか？」

「いや、男だよ。本⼈的にも劣等感コンプレックスらしいからね」

「はあ」

アルエムは曖昧な相槌を打つた。

「随分綺麗なんですね」

「外装と違つてとても言いたいのか

「え、いえ・・・・・」

「まあいいがな。俺はな、普通の精神科医しんじょうくいじゃねえんだよ。
本来ならばお前なんか庶民の相談なんかしねえ」

「しょ、みん・・・・・」

少しカチンときたようだ。

だがそこで切れていては、話にならない。

「零お嬢様のお頼みとあらあ、断るわけにもいかねえ」

「れ、零お嬢様？！」

「あの御方には助けられた。…………私情を挟んで悪い」

と言う間に場所についたようだ。
グラノーラは罪を隠せぬ。

「さあ、どうぞ、患者様」

ヒガハシノミコト

一
ふむ
よろしく

肉弾戦修行？（後書き）

ブランカのスペルは別に英語でけとーにはめただけですよー

肉弾戦修行？

「がつはあ」

苦しそうに膝をつく。

「んつふふん」

「れ、零さん・・・・・、あ、あんた、なにもんだ？」

「僕ちゃん？ 僕ちゃん別になにものでもないよ？」

んしし、と不思議に笑う。

「アルエムちゃん、零処理^{ゼロしょりせんけん}戦拳つて、知つちやつてるかな？」

「も、勿論知つてますよ！」

世界有数の暗殺拳法をすべてこの世から抹消したと言われる伝説の

「」

「あれ僕ちゃんが作つたんだよー」

わらつと言ひ述べた。

「う、え、えええええー！？」

「アルエムちゃんは第一の弟子となつちゃうんだよー。」

光榮に思つちゃつたりしちゃつてね

「こ・・・・・・」

(光榮びじりかー！感嘆で言葉も出ませんよー。)

「んふふ。わあ、まづはアルエムちゃんの実力を教えてもらつたらもうね」

「ただいまー」

精神治療を終え、帰ってきたマリー。

あとは結果待ちなので、暇なのだ。

修行の成果を見るべく、庭に足を踏み入れた瞬間

「がああー！」

とうめき声をあげているアルエムが飛んできた。

「えええ！？」

「んー、弱つちいなあ。つて、マリーちゃんーおつかえりんー。」
「た、ただいまです・・・・・・」

硬いなあ、と苦笑いした。

「さあや、立ちなよ。」

「ダメっす、腹減つて・・・・・・」

「あ、そだねー。」
「飯食べてないね。

ちょうどマリーちゃんもいるし、夕食としようつか

と、手をたたく。

すると、沢山のメイドやら、執事やらが現れ、食事の準備を始めた。

「今晩は、お庭で焼肉ぱーちー！」

「零様、焼肉は昨日です。今日はお好み焼きです」

「そつかあ」

どっちにしろ、零と一緒にいると、太りそうだ。

肉弾戦修行？（後書き）

零の口調意外と気に入っちゃってるんだよねー。

肉弾戦修行？

「しつかしさあ」「あ

口に食べ物を思いつきり含み喋る零。
使つているフォークを二人に向ける。
フォークの先にはパスタが数本、絡まつっていた。
食べるつもりだろう。

「君たち、取り込みが遅すぎる。

初めて発売されたパソコンを今でも使い続けるみたいだよー。」
まあ僕ちゃんなら改造して今よりもっと使いやすく出来るけどね、
と笑った。

だが、それはパソコンの場合である。

「人間は元々専門外なんだよね。」

それはそうである。

請負人と言つても、仕事はほぼ引きこもり。

ハツカ一、クラツカ一、パソコンに関わる仕事しか入らないのだ。
「・・・・・、元々、つていうか。専門外にせざるを得なかつたんだ
よ。」

こんな仕事をしていれば。

「まあ、いいや。運動するし、僕ちゃんはこれでごちさうでした！

メイドちゃん、執事ちゃん、三時のオヤツもお願いしちゃうね

「・・・・・・・・・・・・・？」

零が余りにも元気がなかつたため、メイドたちも不安に思つた。

午後からは、修行はなぜが中止になつた。

零が元気がないのも気になる。

「大丈夫かしら、零さん・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・大丈夫だろ」

そういう会話をなんども続けた。

本当に、心の底から、心配なのだ。

喜多川歌麿

携帯が鳴る。『マーリーのものだ
差出人は、『戸梶 美子』。

「まつ」、まつまつまつまつ

ぐつが

四三

カジンと聞く限り、タイが落ちる。
何か、あつた。

「美子さん！？美子さん！？」

『オレ? オレ? オレの!』と! ? ねえ、おねーさん! !

『調子に乗るな、ディシダ』

グレイム・ラルトウリ。

フィルン・唯・セロル。

カルラ・シャウス

新たな
商

「美子ちゃんのママ！あ、はは！遊びに来いよ！」

おさかにほんぢや

『そおだよお！僕なんて、カルラに買つてもらつたアイス放置して

きたんだよお?』

今頃溶けちゃつてるよー、と電話越しに茶番。

ねえ、なんなの、あんたたち・・・・・

ふん。おい、女。アルエムとやらに伝えておけ。

「？」

『戸梶美子は、あと一時間後に死す、とな
そこで、ぶちりと電話が切れた。』

「ねえ、グレイム！」

「何だ」

「ほんとーに、このおねーさん、死んじやうの?
「アホか。リップサービスの激しいver.だ
「意味が違いますわ」

美子さんモ。

一時間経つたところで、美子は死にはしなかったが昏睡状態のままだ。

「…………、いつもなら、跳ね上がって起きるはずなのに……」

アルエムが心配そうに言つ。

「仕方ありません」

ドアを開けて入ってきたのはあいり。

水と濡れたタオルを持つていた。

「…………、創世者^{マスター}としては、年ではありませんが、人間としてもう。」

フフ……、私もですね。それに

「？」

「創世者^{マスター}としては珍しい……、

五十人以上に力を分け与えているわけですから

この年でこの体力、見た目、諸々を保つ力も薄れてきてるみたいですよ」

確かに、美子の顔を見る限り、疲れてそうに見える。

昏睡状態だが、気持ちよく眠れないというのも不憫だ。

「…………、今日はもうお引き取りください」

「え、ああ。俺らもそうするつもりでした。お大事にと伝えてください」

「分かりました」

「あいり。」

「起きていらっしゃってんですか。いつ頃から？」

「……お前がこの部屋入ったとき。」

「三回ありますよ」

「マリーたちがいたとき」

「まあ、悪い人ですね」

あいりは、レモンティーをとくとくと注ぐ。

「…………頼んでないぞ」

「ええ、そうですよ？“風邪には” レモンティーが一番ですからね

「はん」

美子は拗ねるよじに笑つた。

ほかほかのレモンティーが入ったところで、美子は話し始め。

「あいり、演技、ありがとーな」

「今更何をおっしゃるんですか？全く」

「……………」

「あれは全て、美子様がめんどくさかつただけでしょ？…………、

もつ」

はあ、と嘆息した。

奇襲されたことも。

美子の生命力がピンチなのも。

全て何もかも然り。

嘘だつたのだ。

実を言つと、マリーたちの戦意をそそるため。

恩師である自分自身であることによつて。

修行にも打ち込みやすくなる。

「だけど、一番肝心なのは、零だよ」

「何かおアリで？」

「ああ、何かが弱々しい・・・」

修行再開！？

「零さんが、倒れたあ？」

美子に続き零もダウン。

(正しくは美子はダウンしていないのだが。)

はい、言ひなと止められて いたのですか。

零様にはあなたがたの修行依頼共に寝すに受けでおりました

「はー。帰れせう。

「はい、壁間にかかるかかかかに、」

「アーヴィングの無理でしるじやない……」

「一日だけではありますん。」

「廿五？」

—今田を含め—週間

執事さんは急に冷たい表情 声はないと言ふ

「これ以上、主に近づかないでください。」

「一九四〇年」

「通じませんでしたか？それではもう一度わかり易く申しますわ」

玄関にいたマリーナ川口を突き飛ばし続ける

「もう一度と、零様に近づかないでください。」

消える

• • • • • • • • • • • • • • • • •

「俺なら治せるけど？」

俺なら治せる！

「はあ？」

そうアルエムが言うと、執事は不服そうに言う。

「また彼女を動かそうとするのですか？」

休みも取らずに修行に手伝えというのですか?」「

水を差したみたいだつた。

アルエムは空氣と場が読めない。

• • • • • • • • • • • • • • •

• • • • • • • • • • • • • • • •

「そうですね、帰ります。」

マリーが沈黙を切つた。

「でも、マークー！」

「いいのよ、いい。まあ、行きましょう」

「やあ、おはよ。

オーブンカブエで特大バブエ十分完食に挑戦している彼女。落葉に一人は声をかけた。

「あと一分まって！」

と語りてもまだパフコは半分まで行つてない。

「勝てたら一万円なんだ。ふふ。黒字黒字。」

「店的には、大赤字だよ」
おれら

そして三十秒も経たないうちに、パフェは綺麗に皿から消えた。

「うちはそーさま! 一万円はいらないよ。

さて、そこは運動場借りておいたから修行しようか。

「まだ、私たち、何も言ってませんけど……」

概ね察してゐるよ。

「美子さん、零さん、共に倒れたからあたしにきた、だろう?」

概ねどいか、すべて察していた。

「 もあ、行いゆく」

ぎいい、と音を立ててドアがあく。

仲間真つ暗だつた。

「“相手”はもう来てるはずだよ」

「？」

パチリと電気が付いた。

反対側の入口には三人の影。

そこに居た三人は　！！

コリッタ・モウ

ルナエラ・リキュラ

そして

デビット・アリエルド。

「で、デビット！？」とアルエムが叫ぶ。

「やあ、アルエム」！！

ごん、と鈍い音を立てて何かがデビットの頭に直撃する。

当てたのはルナエラだった。

「デビットダメだよ！」

「え？」

マリーとアルエムは顔を見合せた。

それは、そうだ。

ルナエラはデビットに向け「デビット様」と呼んでいたはず。しかも敬語でない。

デビットは気持ち悪い笑みをルナエラに向け、「ルナアア」と言ひ。「ど、どーなつてんの？ねえ、コリッタ……」「えー、つとですね！」

久々のこのテンション。

「デビットがルナに対しても、ドミ&変態に目覚め」

「ふははははは！」

「きやあああああーーー！」

「助けねばー！」

「さて、本題に入らり」

「デビットは壁にもたれていた。

フルボッコにでもされたのだらう。

「そーしますか」と一同。

「でもあの状態じゃあ、彼は戦えないんじゃ？」

あの状態にしたのは、お前らだろ。

「うん」

「そこには私が戦います」

「？」

「ルナち・・・・・、ルナエリナちゃんは」

「ルナでいいですよ」

昔呼ぶなつて言つたくせに。

「え？ うん、読心と透視能力だけじゃなかつたかしら？」

いえ、と否定するよつに手を振る。

「美子さんに頼み込んで、

“私たち一人”で闇の力を共有する」とこいつたんで

「ーーーなるほどね」

「さあ、始めましょーっ！」

と、ルナエラは微笑む。

「わわわ、と白いブーツが床をじくる。

「ま、マリーーーー！」

と、アルエムが。

「お前弱くね！？」

文句を言ひ。

「失礼ね！あっちが強いのよ！！」

修行再開（後書き）

現実でこれの漫画描き始めました。
なので、挿絵をあげたくてしうがないですーー！
かきますね？

修行再開？

ルナエラが今、身にまとっているこの服。

“モード・戦”。

これは、ルナエラが戦闘で動きやすいよう、
ダーツマスターで作ったもの。

勿論、解除すれば元通りだし、
元々の衣服が傷つくこともない。

便利な一品だ。

かくゆうデビットは。

更衣室のロッカーに閉じ込められていた。

「出せええーー！」

「ああ！そつかあ！」

と、ルナエラが手を打つ。

「マリーさんは接近戦か！」

今更気づく。

マリーはその天然さに無邪気を覚えた。

「忘れてたよ」とはにかんだ。

「ずっと遠距離で攻撃しちゃつた」「
えへへ、と可愛らしく笑う。

マリーはその笑みが悪魔にも見えた。

「じゃ、改めて」

と、またまた微笑んだ。

修行再開？（後書き）

ミスつてあげたのでソックローで更新
短めです

修行再開？

「まあた、マリーの負け？」
ギヤラリーでアルエムが呟く。

「だつてどうせ、ルナちゃんの読心で読まれてるんでしょお」と言い訳するマリー。

脱力しきつたのか、床に座り込んでいる。

「大丈夫！ 間いのちかう使つてる時は使えないの」

「どつちにしろ、マリーはダメだな」

「・・・・・・・・・・・・・・」

落葉のキツイツツココニヒアルエムは顔を真っ青にした。

ガツ、ドガガガツ、と痛々しい音が響く。

「なあな

「なに？」

「俺散歩してきていい？」

不意にアルエムが言つ。

「まあ、かれこれ三時間してゐしね。いいだろ？」

「さんきゅー」

落葉は心の中で深く嘆息した。

(橋だ)

散歩中に橋を見つけたアルエム。

ふわりと青いツインテールが揺れる。

「うおおおおおおおおおお！」

今にも飛び降りそうな姿勢。

「え？」

アルエムは咄嗟に風を使い、その少女をおろした。

「うわうっ！」

ドシャ、と情のない音。

「つたーい！ちょっとお、何すんのさああ……」

起き上がった真っ青な少女。

「はあ！？どこのキチガイか知らねえが、自殺はよくねえよ？…」

(「こいつ！アルエム！」)

「…………ふん、まあいいやあ

(何て言つタイミング！)

「つか、青いな、お前」とアルエムはとぼけている。

「いいの。僕青好きだから

くすくすと不敵に微笑む。

流石のアルエムも引いた。

そして、橋の角に体重をかける。

「お、おいー！」

落ちる。

アルエムは少女を確認するため、下を見るが。。。

流れているのは川だけ。

川に何かが飛び込んだ形跡もない。

「…………」

「消えた？」

ギイイン。ガイン。

刃物がぶつかり合つ音。

その様子を落葉が真剣な眼差しで腕組みをし、眺めていた。

ふと、目を閉じる。

『あいつは

』

『あいつは甘い。』

『甘い?』

聞き覚えのある声。

『フン』

鼻で笑う。

『ユーユーのはな

優しさ

つつーんだよ』

『優しか。。。』

とぼけたように、落葉は繰り返した。

お前はそれが欠けているんだけどな、と美子が笑った。

『だけど』

『?』

『戦いに慈悲や優しさなんて

必要ない。』

「・・・・・・・は、 落葉ー」

「ーー」

マリーの声で現実に引き戻される。

「・・・・マリー?」

「大丈夫?ほーっとしてたわよ」

「え、そう。どうしたの?」

「お休みもらえないかしら?」

「お休みもらえないかしら?」

にっこり営業スマイルでマリーはそう申し出た。

「休み？・・・・・いいよ。じゃあアイスでも誰か買つてきてよ」と、お金を出す。

いちまんえん。

「私行くわ！」

ただ休みたいだけである。

「コリッタ、お願ひ

「はあーい！」

マリーは盛大に落胆した。

修行再開？

アイスを美味しそうに食べる三人をこれまで険しい表情で見つめる落葉。

「あの彼女の分のアイスはないのだ。」

自分から断つたのである。

（優しさ・・・・、あたしには一生理解で）
その思考回路を遮るように、大きな音でドアがあぐ。
そしてアルエムの「ちょっと聞いてくれよ！――！」である。
落葉はそれにいらっしゃり、アルエムをいじめた。

「不思議な青い少女か・・・」

遠い目で考える。

「探すかいがありそうね」

（それはいいとして）

顔を上げ、マリーを見る。

マリーの成長が余りにも“悪すぎる”のだ。

「マリー」

「――」

「やる気がないなら、帰つて」

「はー? どーいう

マリーが最後まで言わずに落葉が指を上げ、それを横に振る。すると、パクツと不吉な音がする。

アルエムの首からパシュウウウと盛大に、血が吹き出す。

「つぐ！？ がああ――！」

「アル！…」

「何すんの！…！」

「そつぞく、 “怒れ”」

「は？」

マリーは一回とぼけることになつた。

「お前らはなんだ？敵と遊ぶのか？あ？」

はつと、マリーは気づく。

確かに言われてみればそうだ。

「相手は、“美子を死へと近付けた”。」
（まあ、嘘なんだけど）

「あたしは

お前らは恩師がただ死ぬのを、見過すのか

と。 聞いたんだ！…！」

修行再開？（前書き）

今回は前作「自然使い ナチュラル・マスター」の『成長の輪』編を、J覧になつて読まれると更に理解しやすいと思います。

修行再開？

「助けられるとおもたのか？そんな慈悲で！」

覚悟は？」

す、と息を吸いもう一度続ける。

「アビットのときもそうだ。何故？」

「…………殺めずに生かしたの？」

落葉の言葉を継いだのは、ルナエラだった。

そして、いつにもなく険しい表情で

「私も、その甘さが嫌い」

そうすれば“私たちは苦しまずにするんだ”、と嘆く。

「違う！！」

ルナエラの言葉を否定するアルエム。

「死んでいい人間なんて、いない」

落葉に切られた首は、自然ナチュラルでなおしたのだろう。

「ふつ、あつはははは！」と。

落葉は笑った。

「戯言たわごとを！」

と一気に真剣な、顔つきに戻る。

「！」

「なんだ？それ！」

“死んでいい人はいない？”はは！笑える冗談ジョークだよ

「…………」

「それなら、殺されていい人もいないはずだよねえ」

「あ、当たり前だ！」

「クスッ、じゃーあ

“あの美術館で”何十人もの人を無残に斬殺した

のは、誰かな？」

「あれは、手加減した！！」

「手加減？はあん」

それならなんで死んでるのかなあ、と不気味に笑う。そしてもう一度笑い、言つ。

“それは相手が能力者だつた時の手加減と同じ”

・・・・・ 相手は“人”だ

それでも 、と続けようとしたさなか。

「はあーい、ストップう？」

と、上から人が。

彼女は明^{ミン}猫鈴^{マオリン}。落葉の親友だ。

彼女はある提案をした。

「合体技！？」

「うん」

こぐりと首を上下に振る。

「例えばね！」

と猫鈴は言つ。

猫鈴がそう言つと、アルエムの左手が“勝手”に動き出す。そして、マリーがアルエムの元へと“勝手に”寄る。

「ちょあつと力借りるね

アルエムの手からは黄色い光。現れたのは無数の木の切れ端。風と木の力。

「これをマリーの力でえ

「えつ？」

しゃうひつひ、と顔を立てて、木は刃の鋭いナイフへと変化した。

「！」

だが。

そのナイフは今にも消え入りそうなるそくの様に揺らめいでいた。
「続けるのは無理か」と落葉。

(やはり、マリー)

「あとは、マリーちゃん次第だあ
すばりと切り裂くように単刀直入。

猫鈴、容赦ない。

「私、次第・・・・

「あつ、えーっとねえ、マリーちゃんはねえー。
「リン鈴」

猫鈴の言葉を落葉が遮る。

「余計なことは言つな

はあい、とけらけら笑いながら返事した。

るるる。

携帯が鳴る。

「！」

通話ボタンを押し、落葉が自分の携帯の着信に対応する。

「はい、落葉ですが、・・・・・はい」

ぶつりと電話を切る。

短い会話だ。

そして

「ふん」

と鼻を鳴らす。

「マリーの精神状態が出せたそつだ。」

(忘れてた)とマリーは思つた。

「ついでにアルも見てもうえ

修行再開？（後書き）

漫画では落葉ちひさんが

「あたし疲れた」って最後のセリフのあとで言っています。

診断結果？（前書き）

新キャラでます。

挿絵付きキャラ紹介でいろいろ。

診断結果？

ブランカの家で待ち構えていたのはブランカ本人の不機嫌な顔だった。

「は？ はあ！？」

アルエムが視線を外す。

「帰れよ、白髪男。用無しだボケッ」

「スマセツ！？」

ぱたむと力強く閉められたドア。

(やらしいことしねえだらうなあ)
と内心疑るアルエムだ。

「ふいいいつ」

「？」

振り向くと誰もいない。

「？」

向かつたと思われる、角を覗く。

今度は左側に曲がった。

『おい、アルエム』

「！」

ブランカのテレビが届く。

『その子追つてもいいが、まよつなよ』

『へいへーい。だだつ広い家なんて作んなよ』

『あ』？

「えつと」

こつちか、と咳き左へ曲がる。

「うおつ！」

そこにはひとりの少女。

前髪は白く、紫の長髪が綺麗に後ろで結ばれている。
だぶだぶの黄緑色した服を着ていて、裸足。

左足にはサポーターらしきもの。

本を抱きかかえていた。

そして何よりも涙目である。

彼女は『クー』。

「…………？」

「ひやあーん」

「あ、おい！..」

「ふん」

ブランカは自身の作った資料を見て鼻を鳴らす。

「お前本当に戦つ気あるのか？」

「あります」

即答だ。

「ふーん」

(これで、か。 わたくしのアルエムといい、“優しそうな”)

「ぴやうーん！」

「待てって！」

走るクーから落ちた四角い箱。

勢いを止められず、そのまま踏んでしまったアルエム。

カチッ

とスイッチが押される音がする。

「力チ？」

その瞬間。

ドン！

と爆発音。

それを確認したクーはホツと息を漏らす。

「へうー」

「てめえ、なにしやがんだああ」

アルエムは普通にしていたはずが、クーには鬼のよつたな形相で睨む人とされた。

「ひゃん！？」

クーは「ひつ」という情のない声を出す。

「うあああん ぶえええん」

その泣き声はブランカまで聞こえるほど大きかった。

診断結果？

「ふわあああああああん びええええええん」

「おいアルエム！！！」

泣いているクーをなだめようとしているアルエムのもとへ、
ものすごい形相の二人がやつてくる。

「何泣かせ」「てるのよ！」「てんだああ！！」

ブランカの蹴りとマリーのナイフが数本突き刺さる。
勿論Ｋ・Ｏである。

「大丈夫か、クー！！！」

「大丈夫？」

「ふいいいつ」

「幼い女の子を襲うなんて！！！」
「ひどくね！？」

「この子は「クー」と一人「ムー」が居るんだがなー」

「ムー？」

「ああ」

ブランカはメガネの淵を抑え、上げる。

「まあ、こいつに出会えるだけ運がいい」
人見知りでなあ、と嘆息した。

アルエムはクーを見る。

人形を投げて遊んでいた。

すると

「もう一人にはどーすれば会えますう？？」
ぐるりと鼻血を垂らして振り向いてきたマリー。

本当の口リコンはこっちなのかもしねない。

「・・・・・会つ?」

「はいい?」

「トイレ、トイレ」と。

だだつ広い屋敷の中をさがすマリー。
すると、トタタッと走る音。

「?」

ペタリ。と不気味な音。

次の瞬間 !

角から出てきたのはムーだつた。

勿論マリーのビストライク。

「かわE! !

よく笑う子だつた。

「マリーに精神状態は伝えたし、さ、帰れ」と、ブランカ。

ムーが袖をついついと動かしている。きつと呼んでいるのだろう。

何度も何度も呼んでも気づかない三人。さすがのよく笑うムーもふちりとキレた。「どーした、ムー？ ……うわあああー…？」

「……宜しくな」

ムーは気が済んだのかとてつもない笑顔だった。

「どーいうことだ？」

「一人が（？）ついて行きたかったらしい

「素足で！？」

「？」

街に出たのはいいものの

「ひう——！」

ムーがショーウィンドウにおいてある作り物のパフェに釘付け。

それを引き剥がそうとクーが一生懸命。

そんな中、マリーに聞こえてきた小声。

「あの一人の子供かしら？ 靴履かせてあげたいわね

「ええ」

正論である。

「はふ？」

ムーはマリーの質問に試食用のお餅を食べつつ答える。

「クツー？」

(喋るのかー)

「らいじょーおぶー」

(かわええ)

「ほ、本当？」

「だつて」「

ドゴッ

頭上からのいきなりの奇襲。

四人は

(クツ、私とアルは大丈夫 、一人は！?)
元いた場所には姿はない。

「よかつた

」

そこでマリーの意識は切れた。
どさりと地面に倒れ込む。

華麗に着地した敵は、ただの、一般女性
マリーを確認したアルエムは激怒し

「てめえ！」

と殴り掛かりそうになる。

が。

アルエムの前にムーが立ちはだかる。

「なつ、お前が行くのか！？」

ふるふると首を振る。

「じ、じゃあ誰が？」

「ふたりでだよお」

上を見ると、泣きつつも大量の武器を持ち、相手に投げているクーがいた。

ドスドス、と痛々しい音を上げ、突き刺さるナイフ。

聞こえる悲鳴。

「—」

刺さったのは全く違う一般男性！

「くつううーー？」

敵を探している時。

ト^{そら}ン、と首を屈ぐ。

空中にいたクーは落ちていった。

だが、まだクーはは立てる。

無理矢理身体を起こしている。

それを見守るように、敵にものすごい威圧を送る一人。ムーとアルエムだ。

「ぐつ

さすがの相手もたじろぐ。

「くそつー！」

と逃げていった。

マリーが田を覚ましたのはおなじみの体育館でだ。

「まつたく」

と落葉の嘆息がお迎えした。

「おとはー？」

ズキン、と痛む頭を抑える。

「無理はするな」

「わかつてる」「
(私、一体何が?)

記憶が、ない。

ぱああ、と白慢の笑顔を向けるムー。

相手は「デビット」。

「！」

軽く萌える彼であった。

そこにすかさず、ルナエラのきつついパンチ一本。

「帰る！？」

マリーがとてもなく不安げな顔を向けてきた。

「へう」

「ちがいますよー、れーさんと、みーさんにおこせつにいくんです

ー

「あ、そつ」

あつさり引いた。

「じばらくはかえりましぇ、せつ、しぇ、ません
かわE!!」

「さて、今日からアルね」

「マジ？」

大丈夫かこの主人公、という顔の落葉。

マリーが一通り終わつたのが気づいてなかつたらしい。
お前それでも彼女見てるのか。

「コリツタ」

「はあーい！」

びしつ、と手を擧げる。

そしてにっこり微笑んで、
「パワーアップした、つかのやんをじへじじ覽あれー。」

ムーは基本ひらがな。

作戦会議

「ふえ」

クーが今にも泣きそうな感じ。

「くわいゅん！」

くしゃみでした。

「あつは！ みずたまりにじごひこむからあー・ダイーブー・」

「こ” ゆ！？」

不機嫌そうだ。

「あ、こけたのぉ？」

ずるずると鼻をすするクー。

そこに。

「あれー？」

「どーしたの、君たちー」

と声をかけられる。

誰かと思い見上げると

傘に乗つて飛ぶでおなじみ美子と、零がいた。

「ふに？」

そして一度見。

「こ” ゆおおおおお」

「アルー！」

「もう終了？」

アルエムの返り血を浴びた「コッタガ」がそこに佇んでいた。

アルエムを見下ろして。

彼は「ぐふつ」と痛そうに血を吐き出す。

「しいぶといなあ」

「何もそこまですることないじゃ」

トソ、と何者かが首を屈ぐ。

「マリー！」

鈍い音。何か重いもので頭を殴られたアルエム。

「カツフルして感情的すぎる。」

上げていた足を静かに下ろす。

「全く」

そこに居たのは美子だった。

「風治るの早いっすね」と落葉。

「僕ちゃんのはただの胃腸炎だからね～～～～～！」
と元気そうな零が言つ。

「お酒の飲みすぎはNGさ！」

2週間程度の徹夜で倒れる体じゃないぞー」とお酒を飲み笑つた。

勿論説得力はない。

「誰か、あの一人をどこか違う場所に移してくれないか？
会議をしよつ」

「さて」

と美子が切り出した。

「今までの出来事は全て嘘だと理解している者だけ出てあるのか？」
と美子が皆に問つ。

勿論返事は

「はい」

だった。

「今回の敵は厄介だぞ」

「例えば？」とテビット。

「二人の能力者、そして未だ不明者が一人だ」

「不明、ですか」

デビットの顔が曇る。

「否」

「それもそれで厄介だが、違う」

「？」

「主犯、グレイム・ラルトウリ。彼だ」

「グレイム？」

そのワードに今度はルナエラが反応した。
「情報持ってるよ……多分」

「おお」

まつててね、と頭に指をやる。

ディスカッション
記憶会話

そして静かに目を開けた。

「グレイム・ラルトウリ。長身で紫色の髪。特徴的な冷たい瞳
所有能力は

『アラッド
『血』』

そこでルナエラは苦しそうに顔をしかめた。

「だめ、これ以上は……何か……」

「無理するな」

ドパアアー！と。

壁がぶち壊れる。

「に”つ！」

ゴン、とぶつかる音。

当たりには煙が舞つた。

咳き込む声も聞こえた。

壁を突き破った人は、落葉だった。

「じそこそ嗅ぎ回るなよー？」

「チイツ」

「おいつ！今ので二人が起きてないか！？」
と誰かが言う。

たしかに今の轟音では起きている可能性が高いだろう。
「見てくる！」と明。

「・・・・あ・・・・・あれえー？」

二人が寝ていた場所には

「やめろアルエム！！」

突き破られた壁から落葉の声。

アルエムといえば今寝ているはず。

だがアルエムはその場にいた。

そして、手からは炎を放ち、ある人物を襲おうとしていた。
そのある人物とは

「てめえが、グレイム！！！」

「！」

ブシュッと不吉な音。

「感情的になるな。 馬鹿か？」

と言い放ち「フン」と鼻で笑う。

当のアルエムは、口から地を吹き出して、膝を地についた。

「動かないで」

「一」

瞬時にでも移動したのかマリーがナイフをグレイムに突きつけていた。

勿論、首元、である。

「ふん。生憎、女を殺すほど外道ではない」「動かないで」

せつぎよりも力を込めた声で言つ。

「帰るぞフィルン」

「はあーい

グレイムは“マリーと全く逆の位置でそして背を向けて”佇んでいた。

「・・・・・！」

だがその逃げ道もある一人によつてふさがれる。
グレイムの前に立ちはだかったのは美子だった。

「おやあ？」

「・・・・・まあ待ちなよ。せつかく来たんだし師匠わたしになにか？」

グレイムは「フツ」と笑み、美子の横を通りすぎたところで二つ言つた。

「あなたはまた、甘こおじけやヰ集団でもお作りですか」

と。

「・・・・・・・・・！」

これには美子も絶句だった。

折角ここまで育ててきた愛弟子を

“甘い”“おこちやま”等の一言で片付けられたこと。
何も、言えなかつた。

実際、彼に一人、否、二人も抜かれたのだから。

「待て！」

だが美子はそれでも彼女は彼を引き止めた。

「もひ、改心・・・・いや・・・もとには戻つてくれんのか？」

「・・・・・・・・・・・・」

そして一言彼はこういった。

「これが、俺だ」

「 ッ

美子の頬には静かにしづくが伝っていた。

「俺らの存在が確実にあちらにバレた」

「マジイイイ？」

墓穴掘るねエエエ、とカラカラ口が笑う。

「・・・・・・・・・・」

険しい顔つきで黙り込んでしまったグレイムにフィルンが

「どしたのぉ？」

と問いかける。

「いや」となんでもないような仕草をして、次の言葉はこうだつた。

「さあ、全面戦争だ」

奇襲（後書き）

まくとゆし詫あつまひせーんば（。 。 ） オイオイ

「すまん……」

いきなり美子の上ト座。

「やめてくださいよ……上ト座なんて……。」

カシャン、と写真を撮る音。

「じゃあ、なんで携帯出してるの……？」

「ヤーよ……。」

ピロコン、ヒーヒーヒ。

「アコー……！」

「セヒ、本題に入るが……。」

と真面目に美子が切り出した。

「“あんなこと”があれば、確実にこいつに仕掛けてくれるだらう」
美子は不安そうに呟いた。

そして一息。

「だがこいつは不完全

「！」

それにマリーが反応した。

美子の言葉に続けるように今度は零が言へ。

「大丈夫なのは、まあ、当然美子ちゃん、僕ちゃん、
コリッタちゃん、ルナちゃん、デビッシュちゃんと一緒に、
あの双子ちゃん……。」

あの双子ちゃんとはムーとクーのことだ。

「…………え？」

マリーがまたも反応する。

自分たちは入っていないのか、どこかとだらう。

「君たち一人は当たり前になっちゃうけど

失敗作だよん」

きついお言葉だ。だが事実。

「だって」

と続けた。まだあるのだろう。

「君たちは人を殺せないだろ？」

可愛く首をかしげてみせるが、無表情。
本気なんである？

「一、殺せます！」

震えた声でアルエムがそう答えた。

「そーか」と零が適当な相槌を打つ。

そして満面の笑みで

「じゃあ僕ちやんを今殺してみてよ

「～～～～～ツ」

絶句。

「冗談^{ウソ}だよ」

クスリと笑むが、その微笑みは不気味そのものだった。

そして美子が。

「どっちにしろ、不完全、未完成。」

「もう修行はいい」

と、落葉。

「！？」

「ルナ、コリッタ、デビット。

・・・・・少しいいか？」

策戦？

「えつ」

「時間を狙つて襲え！？」

それが落葉の頼みだつた。

「ああ、周囲への警戒が薄れすぎだ」
勿論、襲う相手はアルエム、マリー。

「頼んだぞ」

「はい」

三人はそう返事した。

外を見、うつむくアルエム。

「・・・・人を殺さずに助けられないか」

声のぬしは美子だ。

「・・・・美子さん・・・・」

フツ、と微笑み

「単純だな、いつでもお前は

とうそぶいた。

「妾あたしもそんな風に前向きに考えられたらね」

「・・・・・」

ピチヤン、と滴る水。

否、血。

数滴などでない。 大量の。 水たまりができるほど。

「グレイムー、血イ臭い！！」

「あー？」

そして彼は嘆息し

「あと少し、待て」

と言ひ。

指先には滴る血が触れていた。

その血は触れた瞬間形を変えた。

グレイムは悪魔そのもののような笑みを浮かべる。

「完璧だ」

時は、日付は、嘘のよう一ヶ月も過ぎた。

キュー、とカレンダーにバツ印をかくため一本線を引く。
するとどこからかピシ、と不吉な音。

もう一本、キュー、と引く。

今度はパシッ、と不吉な音。

（なんの音？）

マリーが不思議に思う。

次の瞬間。

体育館の壁は、脆く崩れ落ちた。

決着

マリーはその壁に向け、構える。

「...」

-
!

そこはアカルムも駆けこむた

「よお、遊びに来たぜ」

二

「…………お久しぶりですね、零さん」

「知り合い？」

ディシダのウザイテンション。

「アリーナちゃん？」

「お、どうぞおめでたそ!! おめでたそ!!」

同じキンパだねと囁く。

たかぐに心当たりはない

しゅいひひひ、と煙が舞う。

姿はいつしか、彼女らを襲つた女性に変わつたのだ。

「まあつてえ、グレイムー」

とフィルンがグレイムを追いつく。

「！」

だが惜しくも足を止めた。

目の前にルナエラがいたのだ。

「……ツインテールに生まれたこと、後悔しない
要訳：あたしが相手だ

「へえ

と余裕そうに笑つた。

「あら

とカルラの素つ頓狂な声。

「あなた、戦うんですか？てっきり終始見学かと」

カルラの道をふさいでいたのは、零だった。

「あははっ、まーそーなつちやうねー、戦つちやうんだよつー…

「・・・・・・はあん・・・・・・？」

「ラーケフライス
岩手！――！」

と岩の勢いに強く、更に固く握り締められた拳がグレイムを襲つ。

「甘い」

あるヒュームに向かつて手を向けたのはいいものの、その先には誰もいない。

「！」

「…

「…なあ

「…

「決着つけよーぜ」

決着？

「と一ヶづに教えてやるよオオオ」

喜々とした声でそう言つた。

「は？」

警戒を解いていないマリーはただそつ答えるしかなかつた。

「オレの能力を！」

「！」

一息ついて、彼はこゝり言つた。

「オレの能力は アブソーブ 強奪ちからだつ！！ 他人の能力を無条件に奪うパルチする！！」

「！！」

そういうえば、と振り返る。

先程の戦闘でもマリーは奴に自分の術を盗まれた氣がした。

ただのナイフを取り出す手品だと思つていた が！

今その真実を聞かされ、驚くマリーは次の一手は考えつかずにいた

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

こちら、零VSカルラ。

零はとすると

壁にもたれかかり、口からは血が流れいでいた。

「うふふ。あんな自信満々に言つてらつしやつたのに、弱いこと。クス」

口元を隠すように笑う。そして嘆息し

「・・・・・・・・・・止めでも指しますかね」

と冷たく吐き捨てる。

「不幸せな記念日」
ハッピーバースデー

彼女に向かい、強大なエネルギーが猛スピードで

「死ね」

ぶつかった。

辺り一面には砂煙が立つ。勿論カルラの視界も悪い。煙が消えかけた頃。零を確認するが

「！？」

いない。

「いない！？ど、どこに？！」

（まさか、上　！？）

上を見る。案の定。

零と、零をつかんだ男・・・・。バルド＝エクスがいた。

バルドは地に着地し、カルラを見る。カルラは盛大に舌打ちをしていた。

「お、間に合つた系？」

零がバルドの足元で「おそい」と切れた。

「まあいいや。」

と笑う。

「『お遊びの時間』
フリー・アクション」

決着？

「『お遊びの時間』」

そう、バルドが唱えると周りが闇に覆われていった。

「！」

カルラは驚いたらしく、周りを見渡していた。

「さて、これでお前の力はゼロ」

バルドは静かに低く言った。

向こう側には零が口の中に溜まった血を吐き捨てていた。

「これが俺にこれを頼んだ条件は三つ。

?傷の全快

?敵の無力化

?敵の収納

だよ。契約金はなんと驚きプライス一千万』

驚きだ。敵の収納というのは、負けた敵を捕まえておく、という意味だろ？

「…………！」

これにはカルラも絶句する。

(そんな事すれば立ち位置が……あ、謝るつ！)

「あ、謝りますよ！ ですから

「そお」

笑顔でそういう。カルラはホッと一息付いた。

「一発。 ぶち込んでからね」

さつきまでの笑顔が逆転した。

「ひいいいいいいい！」

それを聞いたカルラは這いつくばつて逃げ惑つ。

「ムダだよ」

ゆっくり、ゆっくり足を進める。

「ぶつ！？」

カルラが何かにぶつかる。壁だろうか。

「広さは……そうだね、約教室ぐらい」

「ぐ、来るな！！来ないで！！ 最期の一枚！^{ラストページ}！」

「無駄だつて。攻撃は無力化されてるんだよ。」

につじりと微笑む。

そして拳を握り締め 思いつきり、一発。

「ぐがつは 」

殴り終わると同時に黒い世界がフュイドアウトする。

『お前は他の奴の助けをしin』

頭の中に鳴り響くバルドの声。

「…」

『何かあれば電話しin』

お遊びの時間はどこからでも出現可能なのだ。

「・・・・・うん。ありがと」

「…」

こちら、グレイム＆フィルン

「グレイム～～～、僕も僕も！」

フィルんが妙に元気がいい。

「一緒に戦わせてよ～」

「駄目だよ」

現れたのは、ルナエラ。

「ツインテールの座は譲らないよ

根に持っていた。

「ひひひ、『ディシダ』。

「おおい、おーい？ 弱いよ？」

『ディシダ』の目の前には、口から血を吐き、壁にもたれかかっているマリーがいた。

「ひやひやひや」

「ちらも上機嫌である。

「とどめH H H ! ! !」

そつまつてナイフを振り下ろした。

「なつ！？」

だが、マリーに外傷は今まで付けたものしかない。当たらなかつた、否。

「おーおー、あんま愛弟子をイジめねーでくれよ

「・・・・・お前は 美子！」
バケモノ

弾き飛ばされたのだ。美子によつて。

「・・・・・・・・トセー」

「…」

マリーの、消え入りそうな小さな声。

「やめて、ください」

後ろを向くと、ボロボロで血がだくだくと流れていたマリーが立っていた。更にふらつこっている。

「私一人で・・・なん・・・とか・・・」

「無理言つな。」

「！ 美子さん！！」

「ん？ いて」

どす、と不吉な低い音。

美子の背にナイフが突き刺される。

決着？

美子の背中に重くナイフが突き刺さる。

「さあ、お得意の回復使えよオオオ！」

にいしと意図があるかの様に不適に笑む

その手にもつっていたのは、毒付きのナイフだった。

۱۰۷

「ええ、お父様。幾ら美子でも、使いの力で作った独の解毒は不可なのだ。」

「樂中樂」

（たいていじなひと） 「ああ、これで本氣出してくれるかなアア？」

「……………！」

だ
が

その怒りは、殺意をも超え、更には傷を回復にまで及ぼした。

- ! ?

いつの間にか目の前に現れナイフを構えるマリー。

完璧にペイントしたティシダのナイフがぎざぎざと唸りを上げていた。

ガーンと弾き返し、距離を置く。

マリーの怒りはまだ、おやまつていない。

「お前、なんだー!?」
「なあー!」
・・・・チツ!チツ!チツ!

そういう手を構える。

「ぶつ殺す！――！」

「！」

その頃のお遊びの時間。

「！？」

収納していた、カルラがパリパリと消えていくではないか。

「な！？こいつら、人じやねえの！？」

しまいには全てきれいに消えた。

決着？

「 なつー？」

たたたたと長い道を走る零。

「 本當か！？あいつらは本体じゃない！？」

『ああ ・・・ 声がでかい』

「 ということは倒せないのか？」

『いや』

バルドはお遊びの時間で作ったモーター操作室のような場所にいた。
「お前が倒した時の様に、強い衝撃を『えれば良い』

『ふん？』

「 が

『 ・・・ ？』

遠くを見据える悲しい目で言った。

「 本体は、生きている。」

「 ・・・ ・・・ 流石に一回殺り合つのはキツイなー」

『 ああ

携帯端末を持ち走る零に激痛が走る。

「 ・・・ ・・・ ・・・ ツー？」

その所為で持っていた端末機器は床に落ちる。

『 お、おい！？どうした！？』

零の体の各部がズキズキと痛みつつある。
(まさか)

『 最期の一枚！！』

ラストページ

(あの技は発動していた！？)

痛みはさらに増す。

「・・・・・つぐあ

これ以上心配はかけまいと携帯の通話を切るボタンを押す。ざり、と人が来る音。

「・・・・・

掠れ見えにくい目を開け、誰か確認する。黒い上着に水色のズボン。

そして

ドッ

「おと・・・・・は？」

「ごぶ、と口からは血が流れ出る。腹部をけられた衝撃だ。

その後、抵抗も出来ぬまま蹴られ殴られ続ける零。

そこに居たのは茶髪の似合づ日本人女子だった

「アル！」

どうやら、アルエムのもとにマリーが駆けつけたらしい

その駆けつけたマリーをアルエムは木の力で締め上げる。

「・・・・・ぐ！？」

「嘘つくな、ニセモン」

「マリーの前髪は右分けだ

「気持ち悪いわよあんた！！！！！」

激怒した本物のマリーが駆けつけすぐにアルエムを殴った。

まあドヤ顔であんな」と言わわれては嬉しいが恥ずかしい。

「…………マリーも気付いたか

「ええ」

そしてアルエムは、周りを睨むように見渡し、「見てるんだろ、本物さん！……コソコソしねえで、出でこいよ！」

といった。

あちらもすんなりと

「ふん、いいだろう

と姿を現す。出てきたのは一人。ペたりと裸足が着陸する音が伺えた。

決着？

その裸足の主 グレイムでない者は
「・・・・・！？落葉！？」
落葉だつたのだ。

> i 2 9 6 9 9 — 2 2 0 7 <

「行け」

そうグレイムが指示すると、真つ先に一人を狩りに行く。

「嘘よ！ねえ、落葉！」

狙つたのはマリー。勿論一戦しているので負傷している。
マリーは端まで飛ばされそれから動かなくなつた。

「マリー！！」

そういうて視線を外した時。アルエムも狙われた。
もう一度視線を戻すと、喉元にはナイフ。

「！！」

そしてグレイムから冷たい一言がかかる。

「殺せ」

もう一度。

「殺せ」

落葉はナイフを逆手に持ち直し、顔を歪め、アルエムに切りかかっ

た。

が。

右頬を掠めただけで出た血もごく少量。
それを見たグレイムは

「使えんクズめ

と眩^{フインガースナップ}き指^{パツ}チ^ンした。

すると落葉の体から大量の血があふれ、前のめりに、アルエムの前に倒れた。

ぶちん、とアルエムの何かが切れる音がした。

「グレイム！！！ お前は、俺が ぶつ殺す！！！」

> i 2 9 7 0 0 — 2 2 0 7 <

グレイムはトトをペロリと出し、
「ふん・・・・・やつてみな」
といった。

決着？

両者は数秒睨み合い、そして先手を打つたのはアルエム。

グレイムが追いつかないぐらいの速さで移動し一発で決めた。

「・・・・・・・・・・！」

見ていたマリーも絶句。

壁にまでぶち飛んだグレイムは口から血を吐く。

「・・・・・がつ」

「俺を変えるのはお前への恨みじゃねえ。」

仲間だ

「な、仲間！？」

「さあて」

懐かしい声がする。

「追いついたぞ」

「美子さん！？」

それを見、『ぎりり』と口を噛む。

「お、俺が負けるのは」

「グレイム！……」

そこでフィルンが介入する。

「もう、いいよ。もうやめよ！」

「ひぬせえ……」

「グレイム」

美子が静かに名を呼ぶ。

「お前の勝利は仲間が笑わぬ」

冷たくひつそりとした目でそう続けた。

グレイムは感に障つたように目を細めた。

「お前が勝ちたいのは仲間のためだつたらう」

「なか・・・ま」

2207 V | 2009-03-09

『ありがとう グレイム』

グレイムは静かに涙を流す。 いつの間にか、誰かを殺すために力を使つていたことに後悔しながら。

「やめて、アルエムは右手を構え、止めを刺そうとしていた。

それをフイルンが止める。

暴れてたの」

「う」

フィルンは素直に首肯する。

「え？ ああ、わかるわ」
「……第三次世界大戦と謳われる程の大きな戦争
わかる？」

「それを共に食い止める人を探してたの。
『俺を倒すような猛者たちを』ってね。

『俺を倒すような猛者たちを』ってね。』

「！」

グレイムは腹部を抑えつつ立ち上がる。
そして、微笑んだ。

「残念ながら、お前たちは吟格だ」

決着？（後書き）

挿絵のサイズミスつたけど
気にすんな 誰も見てねえ

父親と

「詳しい事は傷が癒え次第伝えよつ」

「ああ」

晴天とも言える天氣がいい日。

彼女、マリー・ウエーポムンドはまーつと空を見ていた。

「あー、暇だわー」

そう言いつつ。

そう。あれから三ヶ月が過ぎた。

グラームは全身複雑骨折だつたらしく・・・。全治五ヶ月。

医師曰く「生きていたのが奇跡」らしい。

静かな日常が戻つたのだ そう思いマリーは目を閉じた。ドガガツ という音に不快な顔をする。

そしてもう一つの窓を覗く。

「ぬう、やるな！零！！」

「そつちもね～！」

美子の作り上げた異空間で一人は鍛錬中。

「…………。」はあ・・・・・

重々しいため息を漏らすマリーだつた。
(アルはどつか行くし、この人たちは修行漬け・・・)

その頃のアルエムはとくに
崖の上にある一軒家へと向かっていた。

「…………！…………やあ。来たかい。我が息子」

ぎい、と重々しいドアを開け仲へと進む。

「“親父”いるか？
「うん。ここ」

> i 3 2 5 0 2 — 2 2 0 7 <

となりかい！！

「いやー、大きくなつたな！」

へらへら笑いつつアルエムの父・ルゼエム・D・ペイズリーはいつ。
アルエムとゞ白髪だがロング。
だが一番肝心なのは、外見。アルエムの父と言えば五十、はこえ
ているはず。

それなのにまつたくもつてアルエムと同じ外見。

「頼み事かな？」

「！」

「・・・まあ下山しよう。私も美子に会いたい。」

「はー?」

「ひつて再び下に下つむ」となつた。

父親と ? (前書き)

お詫び

前回のお話で挿絵を入れるのを忘れていました。
あげましたので、お暇でしたら、是非。

父親と ?

美子宅

「やあ」

「えええええ！？」

(に、似てる！アルに似てるわーーー)
と内心思いつつマリーは問う。

「えと、お兄さんか・・・何か・・・？」

「父だよー」

「！！」

異常なまでに反応するマリー。

一応一人は付き合っているのでそれはそつだ。

「やあ、美子」

久しぶり、と近付く。

「さん を付けろ さん を」

それを無視するかの様に微笑んで続けるルゼエム。

「うちの息子が世話になつてゐるね

「なんの」

そつちこや、と美子。

「“山”を後にしていいのか？」

「ん？ まあね。いやー地上が面白そ�で」

「ふん・・・・面白い・・・ねエ」

半信半疑な目で彼を見つつ紅茶をすする。

「ところで、マリー、どうだ？」

「あいつの彼女さんだっけか？」

お見通しである。

「ああ」

「別に悪くないが？」

「へー

「？」

ぱさ、と新聞がめくられる音。

「・・・ふむ、第三次世界大戦級の・・・ねえ・・・」

「！ アル！」

「すまん、私だ」

新聞からのぞく顔はなんとなくルゼエムだと察し顔を赤らめるマリー。

「・・・そうかアルエムの彼女くんか。刃物好きそうだね」「！」

その言葉に反応する。

「す、好きです！あの・・・私、刃物使いなんです！」
「なんでおわかりに？と嬉しさを隠しきれず聞く彼女。
「・・・・・使い？」

「？」

「・・・・・あ・・・・・いや、なんでもないよ」

「私は元々占い師でね」
「・・・・・占い？」

「ああ

・・・・・占い・・・・・D・ペイズリー・・・・・
・・・・・白髪・・・・・

マリーの思考はそれだけをかき回す。

「！」

何か思い出したようだ。

「魔法使いルゼエム！？」

「…………ほり？」

不敵に彼は微笑んだ。

「若いのによく知ってるね、“盜賊さん”」「

「…………“元”ですよ……といふか！？」

ばん、と目の前にあつた机を叩いた。

「し、知らないも何も！！」

そして語り始める。

「トリプルエスクラス
SSS級の化け物を一人で倒したり、

“太陽”を操つたり！！

“伝説の人”とも言われるお方がいま！！」

興奮し、我を忘れルゼエムを語りだすマリー。

だがその語りを聞いていたのはルゼエムだけではなかつた。

扉越しに、アルエムが盗み聞いていたのだ。

(知らなかつた……まさか、“あの人”が親父だったなんて)

「あははー」

と、ルゼエムはマリーの話を苦笑しつつ聞く。

話を聞いている最中、彼は指をクルリと回し、円を描く。すると、アルエムの隠れていた扉が外れ、アルエムが転がり込んできた。

「・・・・・アル？」

「前から言つてるだろ？もう少し上手に盗み聞け」「無理だし！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1726s/>

続 自然使い ナチュラル・マスター

2011年10月7日20時00分発行